

「三田藩一揆」の舞台－高熊野と上野ヶ原

幕末から明治維新にかけての市域の歴史は大変特徴のある展開をとげました。中でも明治2(1869)年11月の「三田藩一揆」は、当時の三田藩政に修正を加えたことや、近隣に波及した点でまさに一大事件でした。関係する史料は市史第6巻近代資料Ⅱにまとめてありますが、当時の人々はこれを強訴ごうそ(あるいは郷訴・公訴)と呼んでいました。



上野の辻

おり松林であったと思われる。一揆勢は交通上の要地にあたる高台の松林を拠点に選んだのです。微妙に見通しがきいたであろう当時の松林は、事を進めるのにはちょうどよい雰囲気だったのかもしれませんが。

あらかじめ「夜々山々へ山づたいに」(35号史料)ひらかれた集会を通じて、人々が高熊野に集結したのは旧暦11月15日(新暦12月17日)の早朝でした。三田藩ではおおむね11月14日頃に村ごとの年貢額を確定した納入通知書を発行した(市史第4巻171号)ので、全国的な不作をきっかけに年貢の大幅減免を要求の一つに掲げた蜂起はまさに時期を見計らったものでした。

高熊野を出発して藍・本庄・広野を駆け抜けた北部の一団と、三輪・小野方面を抜けた南部の一団が15日夜に合流したのが上野ヶ原でした。三田の城下たいじに対峙する高台に陣取る人々が焚く明かりは、陣屋や町の人々の眼にどう映ったのでしょうか。現在はすっかり景観が変わりましたが、歴史の転換点でおこった事件の現場で当時の人々の思いに触れてみてはいかがでしょうか。

一揆勢が拠ったのが藍の高熊野と三輪の上野ヶ原でした。高熊野は現在の淡路区付近からテクノパーク、上野ヶ原は大道坂おおどうざかとよばれた三輪神社東側の旧道を登りつめた付近で、いずれも三田盆地の地形を特徴づける大阪層群という地層で構成された平坦な高台です。また高熊野は広野・藍・本庄と美囊郡との境界、上野ヶ原は三輪と高平あるいは川辺郡・北摂方面への分岐点にあたるるとともに、明治年間の地形図ではいずれも針葉樹の記号が付されて